

臨床研究「炎症性腸疾患に対する腹腔鏡手術の適応と手術成績に関する後ろ向き観察研究」についての情報公開

炎症性腸疾患には潰瘍性大腸炎とクローン病があり、いずれも若年者に好発する原因不明の消化管の炎症性疾患です。治療の中心は薬剤や栄養療法などの内科治療ですが、時に手術が必要となります。

一方、腹腔鏡手術は創の小さな手術であり、整容性の面で優れているのみならず、感染症などの術後合併症や術後の疼痛が少なく、消化管機能の回復が早いことが知られています。早期の社会復帰が可能となるため、学業や就労などの社会活動に携わる若年者の多い炎症性腸疾患でのメリットは大きく、現在広く行われています。

近年、強い癒着の予想される再手術例や瘻孔や膿瘍を合併する症例でも腹腔鏡手術が安全に施行可能という報告が増えていますが、すべての症例で可能なわけではなく、困難症例も存在します。こうした困難例を術前の背景因子や各種検査所見から予測できれば、また術後の手術成績からみた腹腔鏡手術の好適症例あるいは行うべきでない症例を明らかにできれば、より適確な開腹・腹腔鏡の術式選択ができるようになり、手術の安全性向上につながると考えられます。そこで、これまで当院で手術を行った炎症性腸疾患症例を対象とした後ろ向き観察研究を計画しました。

研究対象期間：2007年1月～2021年12月まで。

研究対象：上記期間に東北労災病院大腸肛門外科で腹腔鏡手術、あるいは開腹手術を受けた潰瘍性大腸炎、クローン病患者。

方法：診療録の記載内容と当院感染対策チームによる手術部位感染サーベイランスデータベースから収集された、患者背景や検査所見、手術因子、手術成績のデータを用いて検討を行い、腹腔鏡手術の適応基準と除外基準を明らかとします。解析を行う際には氏名や手術日などの個人を同定できるデータは削除した形で行い、特定の患者さんに直接の不利益がもたらされることはないよう最大限の配慮を行います。

なお、研究に関するお問い合わせ、ご意見、研究協力拒否等のご要望につきましては、研究代表者までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

研究代表者：

独立行政法人労働者健康安全機構 東北労災病院
大腸肛門外科 高橋賢一

TEL 022-275-1111, FAX 022-275-7541

〒981-8563 仙台市青葉区台原4丁目3-21